

## 巻頭言

## Once upon a time…

大友 邦

気候が温暖で風光明媚な地方にあった大きな村に昔から伝わるお話。

そこでは長い間何軒かの庄屋のもと、村人の多くは田畑を耕して暮らしをたてておりました。その村のはずれには一風変わった人々が住む集落がありました。どう変わっていたかという、田畑を持たないこの集落の人々は「のぞきめがね」という道具を使った古いや祈禱を生業としており、そろいもそろって人付き合いが悪かったのです。食べ物が乏しくなると彼らは数人で村に現れ、悩み事を抱えている人や病人のいる家を訪れては、めったに当たらない占いと、これまためったに効き目のない祈禱をしておりました。御利益も少ないが、雀の涙ほどのお礼しか受け取らなかったのも、物好きな村人を相手にして集落の人々は飢えることもなくひっそりと暮らしておりました。

そんな生活が100年余り続いたある頃、村人の間で「この前の占いはびったり当たった。」とか「お祈りをしてもらったなら、なんと具合がよくなった。」などという噂が広まるようになりました。長いこと当たらなかった占いや効き目のなかった祈禱がなぜ?と不思議に思った村の若い衆が、村人の間を聞きまわりました。すると集落の連中が昔とは違う、ととてもよく見える「めがね」を使っているらしいことがわかりました。若い衆の1人が本当かどうか確かめようと、そっと集落に忍び込みました。しばらく家捜しをしたあげくに床下の箱の中に後生大事にしまってあった「めがね」を見つけました。急いで家に帰り、具合が悪くふせていた自分の母親を覗いてびっくり。鳩尾の当たりにもやもやとしたものが見えるではありませんか? さっそく村で一人の医者のもとでお腹の薬をもらって飲ませてみると、母親はたちまち元気を取り戻し、もとどおり働くことができるようになりました。「このめがねさえあれば、俺たちだって占いや祈禱をすることができる。もう苦勞して田畑を耕すことはないんだ。」と大喜びしている若い衆のところに集落の頭が訪ねてきて「めがね」を返してほしいというのです。もちろん若い衆は「柵からころがりこんだ牡丹餅をむぎむぎ返す馬鹿がどこにいるか。」と啖呵を切って追い返しました。その後「返してほしい。」「返さない。」という押し問答がしばらく続いたあげく、「めがね」でお金が稼げることを知った村の庄屋がごろつきをやとい、集落を襲わせました。もともと腕力のない集落の人々は一溜まりもなく叩きのめされたあげく、ささやかな住まいもねこそぎ壊されてしまいました。結局庄屋の手にわたった「めがね」は、村一番の宝として多いに村人の懐を潤したとのこと。「めがね」を取り上げられ、家を失った集落の人々がその後どうしたかを知るものはいないそうです。

(東京大学医学系研究科放射線診断学 教授)